

深江の心象風景（3）

六甲山をめぐる人々

筆者　岡　田　茂　義

十一、六甲の山並と「青い山脈」

北を見れば六甲連山の山並みが展望される。南に渟茅^{ちぬ}の海。昔の深江の地は風光明媚な所であった。この曲の作者、服部良一もこの六甲連峰に魅せられた。青い山脈の曲は服部良一が阪神電車の車窓から見た六甲山の山並みを楽譜にした。

「戦後間も無い車内は闇屋や買出しで混雜していた。」と彼が云つたのを憶えている。

だが、週刊新潮平成七年八月夏季特大号に依ると、「青い山脈」の記念碑が群馬県の吉井町の牛伏山に建つてある。青い山脈と云えども、石坂洋次郎の小説を西条八十作詞、服部良一作曲」の記載がある。牛伏山の頂上に立つた服部さんは「素晴らしい展望だ。僕が作った青い山脈のイメージにぴったりだ」と云つた。吉井町の人々が「山脈の会」を作つて碑を建てた、と同町商工観光課の山田稔課長の話。

然し飽くまで、服部良一の見た山並みは六甲山であつたことをここに明記する。

註

予てより青い山脈は六甲山であるという事を確信していたが、この度、平成十年六月五日付テレビ朝日（一〇チャンネル）午後九時

の「驚きももの木二十世紀・名曲誕生に感動秘話」に服部良一が西條八十作詞の「青い山脈・雪割れ桜」を車中より見た六甲山の深い印象とその感動を以て、昭和二十三年に作曲したものである、との一節を確認した。



写真1 高橋川下流からみた六甲山の山並み

服部良一が伏山より連山を眺めて「青い山脈そつくりだつた。」と云つたとしても作曲とは関係の無い事であり、六甲山を見ての事であるのは変わりはない。「青い山脈」はどこまでも六甲山である。

服部良一は十六才の時より大阪シンフォニー・オーケストラのメンバーとし



写真2 二楽荘本館（『二楽荘写真帖』1912年、和田秀寿氏提供）



写真3 二楽荘本館（同）

て所属しており、当時より既に作曲を手懸けていた。而も西條八十のものが多い。蘇州夜曲もそうだ。他の曲と共に一世を風靡する名曲とされて一流の歌手が競つて唱い、更に映画にもなり劇にもなつた。

十二、二楽荘

平成六年六月二十九日、禮子、誠子と商用のため六本木のジエ

トロへ行き、帰りに青山の料亭「穂積」で昼食を摂つた。その時、大きな赤い山桃が料理に使われていたのを見て、これを契機として、神戸本山の山桃の樹が群生繁茂していた山とそこにあつた二楽荘の話をした。この山桃の樹の群生の山は籠から隣接している位置で、下から見るとこんもりした形の山の色が緑濃く他の山並みと判然と区別される。

この山の中腹に西本願寺の大谷光瑞師の発想による二楽荘があつた。印度、或いはアラビアの寺院を模したものであろう。円形の塔柱があり、タイルを敷き詰めた大広間に矩形の大きな池が水を湛えており、睡蓮が浮かび鯉が泳いでいた。

麓から山道を二楽荘まで登つたら、そこにインクラインが設置されているのを見た。インクラインと云えば、京都に非常に関係のあるもので、明治初年東京に遷都されてより京都も時代に遅れないようとにと特に文化の進歩に力を入れた。その一つとして琵琶湖を利用すべく、その水を京都に引入れる構想であり、その為に東山にトンネルを造る大工事を行い見事完成させ、水運のための船をインクラインという新知識を以て上陸させて運送の便をはかつた。

この構想を光瑞師は直ちに「二楽荘に応用した。二本の細いレールの上にトロッコが乗っていて、引上げるワイヤーが付いていた。今のケーブルカーである。当時はインクライン（傾斜用カーリー）と云つた。光瑞師は印度の虎狩りで有名であるが、第二十二代御門主（鏡如上人）である。

併せて、西本願寺一族の大谷光明師のゴルフの業績の一つを書く。昭和六年、彼が川奈の富士コースを造っていた時に、偶々ゴルフ場設計で有名なアリソンがホテルに泊まっていた。これ幸いとコースの一部を設計してもらつた。アリソンはアリソン・バンカーとして、難しいバンカーを造るので知られている。このコースにも二、三カ所この型（グリーンの真下にバンカーがあ



写真4 二楽荘第一ケーブルカー（同）

り、上のグリーンの端が顎の様にバンカーに張り出している）のバンカーが存在する。

アリソンはこのバンカーを全国で三カ所造った。東京俱楽部（朝霞）と広野と川奈である。東京俱楽部は元々駒沢にあった東京俱楽部で一般的の交友俱楽部として存在したので特にゴルフの名称は付けていない。朝霞に移つてからも「東京俱楽部」を継承した。だが、戦時中ここが陸軍の飛行場に徴収され、今の東京ゴルフ俱楽部の場所に移り、この時よりゴルフの名称が付け加えられた。

我孫子にも相模にもこの型のバンカーはあるが、何れも上記三カ所のものを真似て作ったものである。

川奈のコースに戻る。平成三年（一九九一年）未年（辛未）の正月、年男として川奈大島コースを廻る。坂道の連続で難渋してスコアは悪かつたが、4番のgood-byeホールは右寄りに見事に打つて谷を越した。又6番s.o.sホール（147ys）は更に深い谷（左寄りには海水が進入している）を越して直接グリーンを狙い、one-onさせた。ブリッジを渡りグリーンに行けば、見事乗つていた。

然し、ブリッジを渡つて戻つての次のホール7番Ohtani's smileでは前面の谷（6番の谷の延長）に残念乍ら落としてしまつた。大谷光明師はこの難しいホールを見事one-onさせて思わず微笑した。これがこのホールの名称となつた。更に次のショート・ホールTwin（117ys）で前面にアリソン・バンカーがあるので左へ打ち、セカンド・ショットを右にあるアリソン・バンカーを避けて、左の土手に向けて打ち、クッショーンを取り、

グリーンに乗せたが右傾斜のグリーンの為、遂に右奥のアリソン・バンカーに落ちる結果となり、顎のある深いバンカーで四打を叩いてしまった。つくづくアリソン・バンカーの難しさが身に滲みた。

十三、武庫山—通称甲山

①神功皇后が九州の熊襲を討ち、更に竹内宿祢とはかつて海を渡つて新羅の都城に攻め入り国王を降伏させ、百濟・高句麗をも帰服させて引き上げた。所謂三韓征伐である。その時の戦利品である武器を武庫山に納めて戦勝を祝福した。

これは記・紀の記事によるものであるが史実性が少なく伝説的であるとの評がある。(平凡社世界大百科事典)

尚、武庫と呼ぶ由来は奉納した武器の倉庫のことであり、甲(兜)は山容が甲の鎧の形をしている所に語源がある。而も甲山については地殻の底から押し上げてくる火山噴出の力が六甲山の花崗岩層で押さえられ熔岩が甲の鎧の形で固定安定した。この花崗岩層の結晶が脆く次第に白砂となつて流れて行き、あとに硬い岩質の甲山の見事な山容が残り、麓から極めて近い目の前にこの山容を見ることが出来る。

②船弁慶、能の課題である。義経は頼朝との不和のため都落ちして摂津大物の浦より船で西国に亡命せんとした時に、俄に風が変わつて、武庫山、譲葉が獄よりの強風により難航しだした処に、平知盛を初め平家の一門現れ出でて怨みを晴らさんと襲いかかってきたが、弁慶は東西南北中央の諸佛に祈りをかけて平家の追手を追い払い、漸く船を汀に漕ぎ寄せた。

有馬道の事はさて置き、深江からの六甲越え魚屋道に戻り、そこには紺屋の前裁と云う見所があつた。

十四、三田への六甲越え

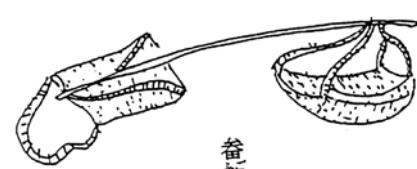
深江から六甲山を越えて行く山道の「魚屋道」は有名であつた。神戸からの有馬道はあつたが阪神間ではこの道だけだったのかもしれない。

西宮からなれば、寧ろ宝塚に出て有馬を経て三田へ行く道を選んだのだろう。深江は漁場である。大阪湾で獲れた魚類を天秤棒で担ぎながら山を越す。それについて母ゑいから聞いた話が面白い。

天秤の片方は荷物、反対の片方に畚(広辞苑)

—竹・藁で編み、物を盛つて運搬する具)をぶら下げてその中にまだ小さかつた自分が入れられて担がれる。時には担いでいる者が肩を替えるために載つている畚が谷の上にかかる。下は千仞の谷だ。恐ろしくて思わず声を出したそうだ。然し、こうしても母は自分の母おいくさん(私の祖母)の郷を訪れたかったのであろう。祖母の郷は日西原の測上家の姓であつた。

測上家は神戸への往復がよくあつた様で有馬道を通つた。時には狼が後を付けて来る。若し、躊躇して転べば忽ち襲いかかる。そんな危険が度々起るのだが、その時は、早速帶を解いて片方を確り持ちながら地に落し、長く延ばして歩いて行く。身近に付いて来た狼は長い帶の端まで遠ざかる。若し、転んだ場合でも起き上がる間をここに作る。色々危険を冒しながら六甲山を越したと聞かされた。



十五、紺屋の前栽—庭のこと

深江の旧道の北側に木下理髪店があり、その奥に磯野萬治郎さんのお宅があった。更にその奥辺りにこの紺屋（紺屋の白袴と云う様に）の藍染め屋があつた。名前は思い出せない。この人が藍染めの商売で、三田との往復をいつも魚屋道を（かよ）通つており、今は芦屋ゴルフ場の区域になつてゐるが、岩間を通り抜けると、一面に開け奇岩を置き並べた様な広場が展開される。その岩と岩との合間に松の木が低く平伏した恰好で美観を添えている。嶮しい坂を登り、岩間を抜けた途端に開ける美観を彼はつくづくと眺めて、同時にこの景色を自分の住まいの庭に持つて行きたいと念願し、又、人にも語つたのである。それでこの山の景色を人々が紺屋の前栽（せんざい）と云うようになつた。

ゴルフ場開発のために、この風景も取壊されただろう。

十六、母「ゑい」を昔はどう発音していたか

平成六年二月に、サッポロビールがその昔のエビスビール工場の広い跡地に、ガーデンヒルズという総合開発事業を計画し、分譲棟の一号館の販売が開始されてその案内書が届いた。

その表示を定めたのである。

それについて、祖父、正蔵は娘ゑい（私の母）を呼ぶ時は「おいえい」と云つた。これが正式のゑの発音だと私達は面白く聞いた。Wをきかせて「おうえい」が正当だろう。ゐは「うい」

で、をは「うお」と発音するべきだろう。

当时、土佐の地方もこのわ行の発音が守られていた様だ。息子を京都大学に入れて将来の出世を望んでいた父親が、夏休みに帰省した息子のわ行の発音が通俗化し乱れていたので、自分は苦笑して京都大学まで入れたのにこんな事になるとは、と嘆いたそうだ。

尚、母ゑいは明治十二年正蔵、いくの長女として生れ昭和六年に亡くなつた。



魚屋道（「六甲摩耶再度山路図」前田康男氏蔵）